

コープ災害ボランティアネットワークニュース

【第115号】2022年4月
東京都生活協同組合連合会
コープ災害ボランティア
ネットワーク幹事会
TEL：03-3383-7800

2021年度コープ災害ボランティアスキルアップ講座第3講は、講師・スタッフを含め70人が参加。講座の前半は、NPO法人防災減災絆プロジェクト代表の朝倉才さんの講義を行い、後半は、自らも障害を持たれている三宅隆さん(中野区視覚障害者福祉協会)と田近八重子さん(中野パーキンソン病友の会)のお二人も登壇され、パネルディスカッションを行いました。

報告

2021年度コープ災害ボランティアスキルアップ講座第3講

障害の理解から学ぶ 防災と減災

講師：NPO 法人防災減災絆プロジェクト代表 朝倉 才さん

主催：中野区障害者団体連合会 共催：東京都生活協同組合連合会・中野区社会福祉協議会



想定外を想定する

1995年の阪神淡路大震災は、震度7を観測し6,437人の死者・行方不明者がありました。その激震で障害のある人たちに何が起こったのか、さまざまな状況での体験談が紹介されました。障害があるからこそ平時の対策努められていますが、災害時には想定外のことが起きます。どのような支援や協力ができるか周りにいる人が平時から知っておくことが、想定外の事態に役立ちます。

障害のある人にとっての避難所は

避難所の多くは学校に設置されますが、設備などは障害者用にはなっていないため、段差が多く、情報伝達は校内放送などの音声で行われます。また、障害によって迷惑をかけるのではないかと遠慮して避難所に行かない人や、情報を得られず避難所に行きたくても行けない人、避難所に行っても運営者や避難者の理解が不足して、つらい思いをされる人もいます。だれもが心身を壊しやすい災害時は障害のある人に、より配慮が必要なことを知り、併せて避難所運営のルールを決めておきたいです。

阪神淡路大震災の教訓から(中野区宮桃町会)

宮桃町会では、70歳以上の単身者、75歳以上の夫婦、障害のある人など「見守り対象者名簿」で把握し、訓練では町内会の地図にビニールシートを載せて住居を記入します。無事な場合は玄関に「わが家は無事です」の黄色いハンカチを出し、出ていない家の安否を確認します。またリヤカーを使って負傷者を運ぶ訓練など工夫されています。

アイマスクとタオルで視覚を、耳栓とヘッドフォンで聴覚を無くして、障害のある人がどのような感覚なのかを体験します。この訓練にはできるだけ多くの方が参加して体験することが必要です。また、障害のある人や外国の方が負傷者の役で参加し、避難所でどう対応するか実践的に訓練しています。



障害のある人への協力

障害がある人が一人で通学や通勤時に、支援が必要なのに障害のためうまく伝えられない、困っていることを自覚していないという場合があります。手助けが必要な人と手助けができる人を結び、障害への理解や支援につなぐために、ヘルプカードがあることも知っておきましょう。

何より障害のある人を知り、よき理解者となることです。お互い日ごろから積極的にコミュニケーションを取り、災害時に助け合うことが大事です。



首掛けのSOSカードです。いつでも、どこでも使える!!



出典：日本聴覚障害者建築協会

三宅 隆さん (中野区視覚障害者福祉協会：中視協)

厚生労働省の調査で全国の視覚障害者は約33万人(2016年度)、全く見えない方は2割8割は見えにくい方で、私はほとんど見えない状態です。目からの情報入手が困難であるため、災害時は手を伸ばした距離でも自宅であっても、非日常の空間が広がることとなります。さらに「給水車がいつどこに来る」などの情報が、貼紙など見る情報では私たちには届きません。



中視協では、個人の備えとして、まず自分の生活スタイルに合わせたローリングストックと、自宅の周囲をよく歩き道を知っておくという話を聞きます。私も東日本大震災では皆さんが幹線道路を歩いている時に、裏道を通ってスムーズに帰ることができました。団体の備えとして、都内3カ所の防災館に行き、実際に災害が起きた時にどのようなことが起きるかを体感し、防災館の人にお話を聴いて学習しています。また、中野区の総合防災訓練に参加して学び、「私たちがやってもらいたいこと」を伝えています。

ご近所の声かけもとても大切です。災害が起きてから声をかけることは難しいので、日頃から、例えばエレベーターで「何階ですか？」と聞くなど、コミュニケーションを取っておくことが必要です。視覚障害者は在宅以外の避難で経験のない場所に置かれると動けない状態になるので、まずは自宅にいても大丈夫な状況なのかを教えていただきたいです。逃げる必要があれば連れ出していっしょに逃げてください。その際に後ろから押したり白杖を引っ張ったりされることは、私たちにとってはとても怖いことなので、まず声をかけ、手引きしてくれる方の肩やひじを持たせて移動してください。貼紙での情報があれば内容を教えてください。

また、私たちは何もできないわけでないので、「私はここまではできる」ということを発信し、その上で「何ができないか」を伝え、周りの方に助けていただくことが必要だと思います。例えば、東日本大震災で被災した視覚障害者が、避難所で1カ月たった頃、自分は避難所の中でほとんど動かないで過ごしているのに、周りの人たちはボランティアなど活躍しているように感じ、精神的に追い詰められたと聞きます。そこで、その方はあんまマッサージの免許を持っていたので、簡易的に横になれるスペースを作ってもらい、ヘトヘトになって帰ってくるボランティアの方たちに、マッサージするボランティアをされたそうです。

災害が起きた時、私たちが助けてもらいたいことは助けていただきたいし、私たちができることがあればぜひ協力させていただきたいと思います。そして、「困っている人を見かけたら声をかける」のではなく、「困っているかもしれない」から声をかけ、困っていることを引き出すきっかけを作ってください。

田近 八重子さん (中野パーキンソン病友の会)



発病して17年になり、普通に動けることもあります。薬が効かないと動きづらく、薬が効きすぎると体が勝手に動くようになることもあります。身体のバランスが悪く転ぶことも多くなります。機敏に動けないため災害時に一人では逃げられませんが、手を引っ張ったり押したりする介助は、自分のリズムと合わない場合むしろ危険になるかもしれません。

災害への備えとして、友の会の仲間と話すことが、情報を得られ孤立を防ぐことができると思います。日常の備えとして、ローリングストックや、パーキンソン病の薬が無くなると動けなくなってしまうので、1カ月は余分にもらっておくことを心がけています。今日の講座に参加して、災害が起きた時の画像を見て、さらに備えておかなければと思いました。

友の会には健常者の方にボランティアに入っていていただいて、卓球大会やクリスマス会などのイベント行っています。ボランティアに興味を持ってくださる方がいらっしやると心強いです。

参加者アンケート (一部抜粋)

- ・お互いできることをし合うことが必要です。災害は起きる前が重要で、備えと近所のつながりですね。
- ・障がいのある方からお話を聞く機会がなく、今後の防災活動や日頃の対応においても頭に入れておきたい事がたくさん聞きました。避難所で何もできないことも苦痛であることも考慮すべき点であると知りました。
- ・手を差し伸べる時に相手の気持ちを理解しながら支援のお手伝いをしなければならぬと思いました。全てができるわけではないので、相手ができることを理解し、できるお手伝いをしたいと思いました。
- ・「不意の地震に不断の備蓄」良い言葉です。心掛けたいと思います。
- ・障害のお立場から防災を見るという観点はとても良かったです。社会的配慮が必要な方に対し、こういった心構えと態度をとるべきか、避難所で悩む前に知っておくことが重要だと理解でき、本日の講座に参加して良かったです。

この講座では、要配慮者とくに障害のある人の災害時の具体的な知識を学び、支え手として取り組むきっかけになることを目指しました。講師と登壇者に加えて、参加されていた知的障害児の団体「中野区愛育会」会長の官澤さんからも、障害の個性の違いや、違いに合わせた災害時の対応の難しさについてお話があり、障害のある子どもさんには、わかりやすいことばでやさしく声をかけてほしいとのことでした。

いざという時の大事な備えとして、平時からご近所さんとあいさつをして、障害のある人にはもちろん、困っているかもしれない人に声をかけることにもチャレンジしましょう。

